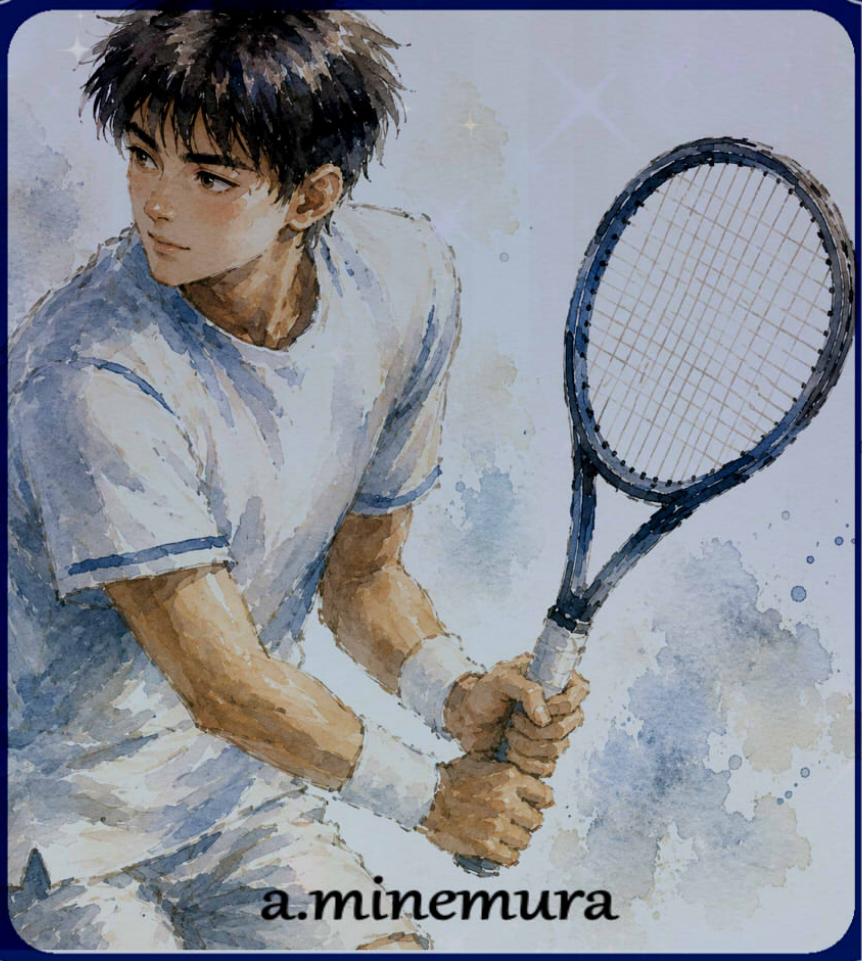
series Salamander in the circle

kent-fifteen



a.minemura

目次

kent-fifteen

はじめに　&　お知らせ 2
登場人物 4
01・病院の面会室。室内には男が４人いた 6
02・知らないお兄さんの身元を証明しろ、だって？？ 7
03・お兄さんは立ち上がったまま僕をずっと 9
04・健人それは僕の名前だ 12
05・ふくざつな表情をしていたお兄さんが見せた初めての柔らかな感情 14
06・パパは頭ごなしに反対したわけじゃない 17
07・行動を共にすることはできないと最初から 19
08・僕は――いきなり頭に血がのぼって―― 21
09・この人は本気で言ってるの？？ 22
10・ジェット機が遭難したんです 24
11・前に進むには父親という存在と 25
12・病院の食堂ってふしぎな雰囲気だ 27
13・三十年前の新聞記事を調べよう 28
14・どうして誰も教えてくれなかったんだ 30
15・三十五歳の息子と二十八歳の父親 33
16・今夜は一杯やりながらとりためたお笑い番組を 35
17・ひいじいちゃんは、はたと身構えた 37
18・人生最大の、びっくり仰天、晴天の霹靂的な何か 40
19・これほどかしこまったひいじいちゃんは初めて見た 42
20・死人を生き返らせ現世に復帰させる 44
21・男たちが呪文のように「五階」と唱えながらぞろぞろと 46
22・これはまたずいぶんと弱気なことを 48
23・全員招待するには人数が多すぎる 50
24・おまえと話したかった 52
25・追い風のなかを航海に出る 53
26・勘弁してくれそれだけは 55
27・証明終了 57
28・嫌な予感とともに上司の元へ出向く 59
29・魂の求めるままに 61

30・「いいね」、と間宮真は言った 64
あとがき 68
奥付 70

kent-fifteen

はじめに　&　お知らせ

Puboo ご利用の皆さま、おひさしぶりです。ミネムラでございます。

☆　この電子書籍と同じ内容で、web ページを設置しました。内容は同じではありますが、ぜひお越しください　☆

さて、この『kent-fifteen』という作品は、2021 年 12 月に Puboo にて一度公開したものです。
後世の『リ・コンストラクション』の発端的『nanako-fifteen』だけがあって、『Salamander in 〜』第五章あたりを書いてたころです。
『リ・コンストラクション』が一応 2026 年 2 月に完結し、そのあと、全シリーズを Amazon Kindle で販売するための作業を続けておりました。

Kindle で配信するのに Puboo で有料になっている必要がありまして、やむなく有料化ということに。やむなくです、やむなく。無料のままにしておきたい。けどねえ、配信範囲広げて（ 有料化して ）誰にも読んでもらえなくなったら？　　元も子もないんじゃ？？

それはそれとして。Kindle に配信申請すると、販売されるまでに、（ 一作品につき ）一ケ月くらいかかりますよってことで、じゃあゆっくりやろうと思ってたら、実際は三、四日くらいしかかからなくて、先のことまで考えてなかったのですよ。作業はとんとんと進み、今のところ、『リ・コンストラクション』の第四部・第二十二章（ Name is Meruno-2 ）まで申請が通って、すみません、有料となってます。表紙が半分くらい差し替えてありますが内容はほぼ変わっていません。

そして。ここで立ち止まったのはリライトするならここからなのです。『リ・コンストラクション』後半に当たりますが、突っ走ってしまった観があるのでじっくり手を入れたいな、と。なので、リライトが終わるまでは第二十三章以降はしばらくの間、無料のままにしておきます。

このことをどうやって Puboo ご利用のみなさまにお伝えしようかと考え、『kent-fifteen』を再登場させることに。

冒頭で触れましたが、この作品、ほんとにシリーズ初期に書いたもので、のちの『リ・コンストラクション』と設定が違っているところが多々ありますし、最終的な形ではないため、有料化の予定はまったくありません。なので、恥ずかしげもなく自絵を詰め込んであります。

でも表紙だけはなんとかならんもんかと、今流行りの AI に自絵を流し込んで、色々やってみましたが。う〜〜ん...何度やってもなにげに違和感が...これは真じゃなくて、健人ですわ。そうだ、そうしよう。(おいおい)
ちなみに、真はラケット左手で持ってます。ほかの絵は全部そうなってる、はず。表紙とさいごのだけは右手持ちの健人、ということで。

なお、今後、進捗状況などは　こちら　でお知らせする予定です。

草々

登場人物

間宮 健人	十五歳の中学生
間宮氏	元・神職の老人　健人の曾祖父
塚田氏	県警・人身安全対策課の職員
若林氏	病院のソーシャルワーカー
桧山　健	病院に収容された身元不明者
間宮 ひろ	桧山夫人
A.パウジーニ	桧山健の個人秘書
西ノ宮 優美子	病院の所有者　桧山健の第一発見者

cast.JPG

01・病院の面会室。室内には男が４人いた

「すぐに連絡とれたのがおまえだった」、と曽祖父がいう。僕の父の母の父だ。僕は目下、学校の寮で暮らしている。両親は今、日本にいない。パパは今ごろアメリカだし、ママは先週からフランスへ出張中だから。ねえひいおじいちゃん、僕は声をひそめた。いったい何？ この人たちは誰？

ここは病院の面会室。室内には男が４人いた。胸に、顔写真と、若林、と名前の入ったプレートをさげた人が僕に名刺をくれた。ここの病院でソーシャルワーカーとかいう仕事をしてるんだって。四十代くらいのおじさん。地味な顔に目がきらきらしていて、その目でじっと僕を見て「どうぞよろしく」と言った。低い感じのいい声で。

黒っぽいスーツを着た人が同じように名刺をくれた。〇〇県警察本部・人身安全対策課名前は塚田。この人は顔に表情というものがなくて、ただ、「県警の者です」とぶっきらぼうに言った。若林さんと同じくらいの年恰好。

それと、曽祖父と、もうひとり。この人はパジャマ姿で、点滴のスタンドをイスの横に置いていて、透明な細いチューブが腕に繋がっていた。どこか疲れたような、困ったような顔をしている。まあ、病院内で点滴打たれてるということはつまり具合がよくないんだろう。年齢は.....そう.....うちのパパよりは若いかもしんない。それにしたって、曽祖父以外は知らない顔ばかりだ。なのに、みんなの目が僕に向いている。きらきらした目と、なんだか胡散臭そうな目と、疲れた目と。

ねえひいおじいちゃん。これはいったい、なんなのさ。

「うーむ」と、ひいおじいちゃんはうなった。「実はな、健人や」ふだんはひ孫に受けようと涙ぐましいだじゃればかりとばしている人が、まじめな顔で重々しく言った。それから、この人を、と点滴パジャマのお兄さんを指差した。「この人の身元を、おまえに証明してほしいのだ」

02・知らないお兄さんの身元を証明しろ、だって？？

　数学の証明問題は得意だ。しかし、僕は今不機嫌である。大好きな数学の授業が始まって７分のところで、いきなり呼び出されたからである。ひいおじいちゃんから、学校の事務室に電話がかかってきたのだ。

「ちょっと来ておくれ」、「病院まで」。

　独り暮らしのひいじじいになにかあったのか！？　　と大慌てで席を立ってきてみれば。知らないお兄さんの身元を証明しろ、だって？
数学の授業は三時間目で、給食の前だった。お腹が空いてもいた。そのうえ、知らないお兄さんの身元を証明しろ.....って.....。ほとけさまのように柔和な僕でも、怒るときは怒るぜ、いい加減にしやがれ。ひいじじい。

「Who is he？」

　お兄さんが、ひいじじいに向かって言ったのである。このくらいの英語ならわかるぞ。彼は誰ですか？――って、え――英語？　　それに、彼の方も僕を知らないってこと.....だよね？

ひいじじいは、おもむろに腕組みなんかして、うむ、と重々しくうなずいた。大丈夫か。とうとうぼけてきたか。

「あー。きみ。ちょっと質問させてくれ」
　ぶっきらぼうな声が言った。僕に向かって言ったんだ。県警察本部の塚田って人だ。警察ってーことはつまりお巡りさんか？　　僕が（心理的に）身構えると、「いや、事務的な質問だよ。あとで書類を作るのに要るもんだからね。それで、きみの名前を聞かせてくれないかね」

　.....間宮。けんと、といいます。

　塚田さんはまじまじというかじろじろというか、しばし僕を眺めてから言った。「けんとの字はどう書くの？　　カタカナ？」

「いいえ、漢字です。健康の健に、人」

「……ふむ……生年月日を……」

　聞かれるまま生年月日を答えた時、お兄さんの目がなんだか――険しくなった、ような気がした。

03・お兄さんは立ち上がったまま僕をずっと

「現在の住所……〇〇学院の学生寮……ね。えーと……お父さんの名前と職業を……」

「父は間宮 真、テニスコーチです……」

「Just a momen！」
　お兄さんがいきなり声をあげた。そして、がたっと音をたてて立ち上がった。点滴スタンドが倒れそうになり、若林さんが慌てて手を差し伸べてスタンドを支えた。
まあ、驚くのも無理はないさ。テニスの間宮真といえば、日本人で……少なくてもテニス好きの人の間で……知らない人はいないだろうから。
しかし、お兄さんは僕を睨みつけていた。切れの長い、きつい目を見開いて。それは、間宮真のサインが欲しいという目ではなかった。

「Are you his son?」
　おまえは彼の息子か？
　――ん？　このお兄さん、父のことを個人的に知ってるのかな？　なんだか――めんどくさいことになりそうな気がしてきた。でも、父は父で、僕は僕だ。父に関することはとりあえず僕には関係ない。僕はお兄さんをまっすぐ見上げて言ってやった。

　僕は間宮 健人。間宮 真は僕の父です

「えーと」と、塚田さんがボールペンのお尻で頭をかいている。「あなた、日本語はちゃんと理解できるようですね。じゃあ、伺いますが、間宮真氏とあなたはどういった関係ですか」

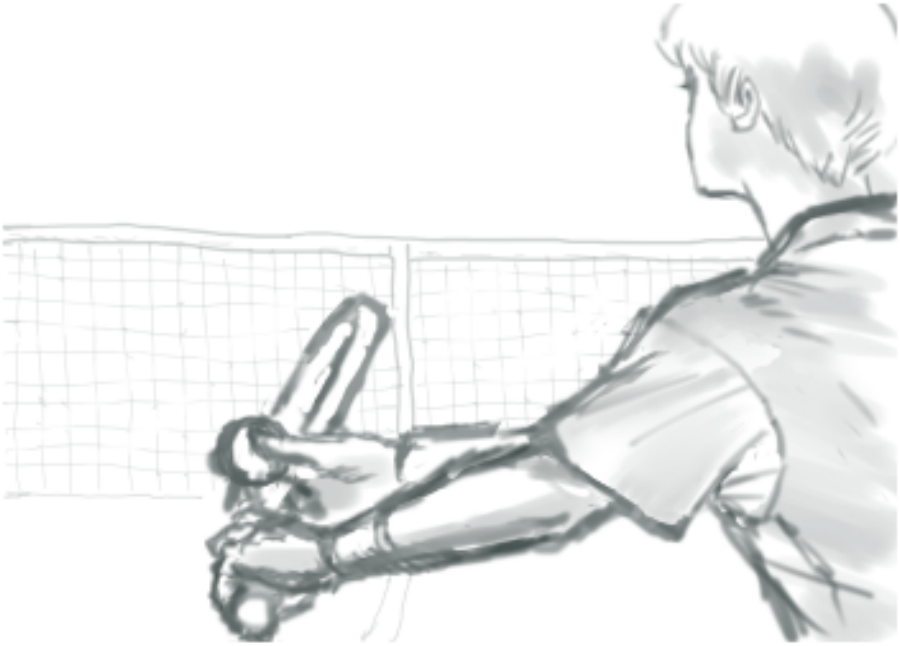
　お兄さんは立ち上がった姿勢のまま僕をずっと睨んでいた。塚田さんは同じ質問を二度繰り返した。ひいじじいが、まあまあ、となだめすかすようにお兄さんをイスに座らせた。若林さんはきらきらした目でお兄さんと塚田さんと僕とを交互に見ていた。その足元にレポートパッドが落ちている。ずっとメモを取っていたのがさっき点滴スタンドを支えようとしたはずみで落っこちたらしい。

「between me and him?」僕を見たまま、お兄さんは怒ったように言った。「He is my son.I am his father.」

『彼』はこの場合、僕の父、間宮 真のことだ。「間宮 真は私の息子。私は間宮真の父」

すると――このお兄さんは――僕の父の父？　　僕の父はこの人の息子？

――はあ？



03-b.png

04・健人それは僕の名前だ

「Kent？」

　お兄さんは僕に直接話しかけてきた。どこか呆然とした顔つきだったけど、ふと思いついたように、若林さんの足元のレポートパッドを拾い上げ、筆記具を探した。あいにくペンはどこかへ転がってしまって見当たらない。塚田さんが、ほいよ、というふうにボールペンを差し出し、お兄さんはそれをひったくるように受け取った。そして、考え考え、パッドの上にボールペンを走らせた。

『健 人』

　お兄さんはそれを僕に見せた。線はぎくしゃくし、お世辞にも上手な字じゃない。でもそれは僕の名前だ。僕はうなずいた。するとお兄さんはじっと僕を見つめ、見つめながらなにか一心に考えているようだった。

「How is your father?」

　ええ。元気です。とても。

「Is that so.....Where is he now?」

　仕事でアメリカに。

「What kind of work?」

　テニスコーチです

「Tennis coach.....Tennis.....」

　Tennis.....と、ひどく不思議そうにつぶやくので、僕はつい尋ねたい気分にかられた。

五年前までプロプレイヤーでした。最高の記録は全豪オープン準優勝。日本人同士の決勝戦、相手は日本人選手で、日本中が熱狂して。知らないんですか？？

05・ふくざつな表情をしていたお兄さんが見せた初めての柔らかな感情

　僕のひとことに、塚田さんの視線がすいっとお兄さんの方へ向くのがわかった。お兄さんは、ふっと笑った。疲労と困惑と緊張、そんなようなのが混ざり合ってずっとふくざつな表情をしていたお兄さんが見せた初めての柔らかな感情だった。

「Did not know.He was a tennis player.He was doing such an activity.」

　僕は父のゲームを見るのが大好きでした。練習の時も、試合の時も、いつも、変わらなくて。いつも真剣で。

「Did you love him?」

　はい。もちろん。

　そうか、というように、お兄さんはほほ笑んだ。僕はどきっとした。きつい目元が和み、その目を伏せた時、頬に涙が流れたのだ。けど、言わずにいられなかった。

　で、でも、父はひどいんです。僕は父のようなテニスプレイヤーになりたいのに！
絶対ダメだっていうんです！

「why？」

　父はプロプレイヤーとしては体に恵まれなかったんです。身長は百八十なくて、それだと、百九十センチクラスがざらにいる世界のトッププレイヤーと戦うにはハンデが大きくて、いろいろ無理しなくちゃならなくて、いつも怪我や故障の種を抱えていた。
体格には恵まれなかったかもしれないけど、足が速くて、体は柔らかくて、頭も柔らかくて、センスは凄かった！

『あんなコースにそんなスピンのかかったボールをこんなスピードで送りこんでくるか！？　間宮真のテニスは予測が難しい。誰にも真似できない！！』って！

　なのに、手の長さや脚の長さだけはどうしようもなかった。身長の高い相手と打ち合う時、相手の手足の長さとの差を、パパは筋肉を使って埋めなきゃならない。オリンピック候補だった年、走れないくらい体はもうぼろぼろで、辞退しなきゃならなくて……

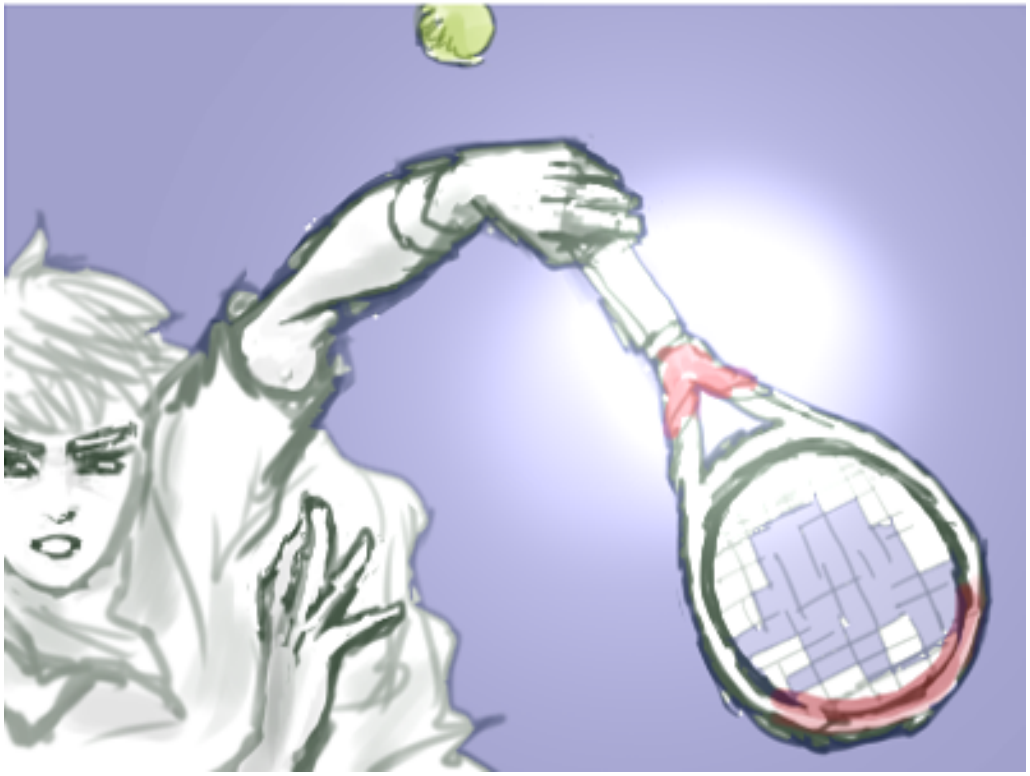
　父は僕に電話してきて、今日の試合が最後だよ、オリンピックには出ない、ごめん、って。僕はびっくりした。なんで謝るの！？

『おまえ、パパがオリンピックにでるの、楽しみにしてただろ？』

　オリンピックなんか！　　オリンピックなんか――そりゃ、楽しみにしてたけど――そうか、パパ、膝が痛いんでしょう！？

父はなんとも答えず、それからお土産はなにがいいとか、とりとめもない話をして電話は切れた。その日の試合の後、父が引退宣言した時には大騒ぎになって――母も知らなかったって――それからしばらくして、父が家へ帰って来て、やっと落ち着いて話ができるようになった時、――その時僕は八歳になったばかりだったけど、ちゃんと頃合いを見計らったさ――僕は言ったんだ。パパみたいなテニスプレイヤーになりたいって。

父は――真面目な顔して、きっぱりと、首を横に振った。『健人、パパは反対だ』



05-b.png

06・パパは頭ごなしに反対したわけじゃない

「まあ、その、なあ、健人や」
　ひいじじいがそうっと横から口をはさんできた。僕がカリカリしてきたんで、心配になったんだろう。「パパは、頭ごなしに反対したわけじゃないと思うが.....」

　いいや！　僕はきっぱりと首を横に振った。
頭ごなしに反対した！
僕はテニスの話をたくさんしたかったのに、パパは『したくない』と言った！　それから、ふらっと家を出て行って、それっきり帰ってこない！　どこでどうしてるのかって、僕もママもうんと心配した。そしたらさ！　プロプレイヤーのコーチを引き受けたっていうんだ！　専属コーチになって試合についていく、って。そんなのあり！？　僕にはテニスの話はするなって言ったくせに。ママなんか、久しぶりに家族が揃ったんだからみんなで温泉に行こうって計画立ててた。それなのに！！

「あああ。温泉旅行にはおじいちゃんも誘われたんだよ。立ち消えになっちまったが、ありゃあ嬉しかったなあ。お義父(とう)さま、ご希望の温泉はございませんかしらなんて電話がかかってきてなあ。ああ真はいい嫁をもらったもんだって感激したよ」

　お義父(とう)さまじゃなくてお義祖父(じい)さまだろ

「ま、まあ、そうだが」

　そういや、さ、ひいじいちゃん。パパたちは結婚式やってないんだって？　そうだ思い出した。引退して帰って来た時に、ちゃんと結婚式をやろうって話をママとしてたんだよ！

『きみは思いきり好きなドレスを選ぶといいよ』
『私はそういうセンスがないのよ』
『きみはなにを着たって似合うよ』
『そう？　でも私、あなたがこれがいいっていうのにするわ』

　なーーんて、いちゃいちゃいちゃいちゃとさあ

「おまえなあ、両親の話を盗み聞きするのはいかんぞ」

　盗み聞きなんかしてないよ。僕の目の前でやってたんだよ。いい加減にしろよって言いたいよ

「いやいや、健人、彼らは十何年も離れ離れで暮らしてたんだから。大目にみてあげなさい」

　はぁぁ？　　あのクールなママが温泉旅行だ、ウェディングドレスだって大喜びしてたんだぜ？　　それをぜーんぶうっちゃらかして勝手にどっかへ行っちゃったヤツを、どうすれば大目に見られるのさ

07・行動を共にすることはできないと最初から

「うーむ、おじいちゃんが言ってるのはだな、おまえの両親は互いのことをちゃんとわかっとるということだよ。いや、互いのやるべきことをわかっとる。かたやプロテニスプレイヤー、かたや学院の専任理事、行動を共にすることはできないと最初からわかっていた」

……

「わしは彼らが今のおまえくらいの、中学生のころから知っておる。
学校というところは実はえらく窮屈な場所だ。ことに人間関係においてな。他者の抜きんでた能力に対して不寛容なところがある。じっさい、真が中学生になった時わしはそう教えた。目立つ者は叩かれる。出る杭は打たれるのが世間、だから、おとなしくしとけと。まあ、茶飲み話的処世術としてな。

ところが。

才能とは授かるもの、人は、それを存分に伸ばし、活かすべきだ、というのが彼女、おまえの母親の考えだった。
それは確かに正しいが、青臭い理想論、と言ってしまえばそれまでだ。
しかし彼女は理想を実現させることは間違っていないと考えていた。確かに間違ってはいない。いや、素晴らしいことだ。
けれども、正しくてまちがっていないことを主張すると往々にして集団の中で孤立しがちだ。とくに学校のような閉ざされた場所ではな。
わしはじじいが口を出すことじゃないと、黙ってみていたが、正直、はらはらさせられたよ。が、どんな逆風も彼女はものともしなかった。だから真は、世界へ出ていくことができた。世界でトップクラスのプレイヤーとして活躍できた。体に限界が来てしまってからは他人を縁の下から支えようとしている。ヴィオラさんは真のやることをちゃんと理解しておる。
真は彼女の現実化した理想なのだよ」

現実化した……理想……？

「うむ」

07-c.png

08・僕は――いきなり頭に血がのぼって――

　現実化した理想……現実化した理想……？

　僕は――いきなり頭に血がのぼって――ばっと拳を振り上げた。みんながぎょっとしたのがわかった。いや、なにもひいじいちゃんをぶん殴ろうとしたわけじゃない。ただ、こう。気持ちの持っていきようがなくて。思わず振り上げてしまった。今度は拳の持って行き場がない。しょうがないから自分の太ももを自分で、ばん！ と殴った。

　そんな！　たいそうな話かよ、じいちゃん！　じゃあ僕はなんなんだ！　自分たちで勝手にこども作って！　こんな世界の果ての片田舎に閉じこめて！　自分たちはいいように世界中を飛び回ってる！　僕は三年生なんだ、来年どうするかって、考えなきゃなんない！　このまま学院の高等部へ進むか、それとも――担任の芦原は、とにかく両親とちゃんと話し合えっていう。話し合えったって！　どっちも外国行っててつかまりゃしない！　パパとママだけじゃない！　おばあちゃんもひいおばあちゃん (※) も！　僕はといえば自分の進路に頭抱えながらひいじいちゃんの心配しなきゃなんない！　そのひいじいちゃんは理想化した現実だとか寝ぼけたこと言ってるし！！　みんな勝手だよ、みんな、みんな、勝手だ！！

　一気にまくし立てて僕は息があがってしまった。はぁはぁしてると、「健人や」と、ひいじじい。「理想化した現実ではない。現実化した理想」

　ど、どっちでもいいよ！！

「いや、ちがう」

　おんなじだって！！

「いやいや」

※：健人の曽祖母は健人の祖母と海外で暮らしている。曽祖父の間宮氏はひ孫の面倒を見るために日本で独り暮らし中。

09・この人は本気で言ってるの？？

「健人」

　点滴パジャマのお兄さんが僕に話しかけてきた。感情をぼくはつさせてしまったからには、こっぱずかしいけど、もうどうでもいいやという気分だった。

「授業中だったんだろう？　　オレのせいでこんなところまで来てもらって、すまなかった」

　は、はあ

「あれ。健くん、きみ、日本語でしゃべっとる.....」

「ああ」お兄さんはふっと笑った。「どういうわけか、急にスイッチが入ったというか、切り替わったというか。健人の剣幕に驚いたからかな。目が覚めてきた感じだ」

　.....健、くん？

「オレの名だ。桧山 健という。健人の『健』と同じ字。間宮真は自分の父親の名を、息子につけたらしい」

　僕はお兄さんをまじまじと見た。この人はパパのお父さん？？　　本気で言ってるの？？　　だって――

「信じられないという顔だな。無理もない。別れた時、真はまだ五歳、オレは二十八だった」

「そうだったねえ.....三十年前だ.....」

　パパは三十五歳だ。でもこの桧山というお兄さんは.....そう、お兄さんなんだ、おじさんて感じはまったくない。三十年前だって？　　何があったんだろう.....

09-b.png

10・ジェット機が遭難したんです

「三十年前とは？　その時いったい何が？」

　すっかり忘れていたが、県警のおじさんとソーシャルなんとかのおじさんがいたんだった。口をはさんできたのは県警の塚田さんだった。ひいじいちゃんと桧山のお兄さんが同時に口を開いた。

「飛行機事故です」、と。

「北極海に近い所で、十人ばかり乗ったプライベートジェット機が遭難したんです。日本人の名が三人含まれてたんで、日本でも細かく報道されましたっけ、当時の新聞に記事があるはず」

　ひいじいちゃんがしゃべりだすと、塚田さんは疑わしそうな顔で話の腰を折った。「日本人が三人？」

「ええ、彼、健くんと妻、息子の三人。桧山夫人は私の娘で、息子の名は真。遭難したジェット機は三日後に発見され、乗客は一人を除いて生還と、記録が残っとるはずです」

　塚田さんはノートを取り出して書き込んでいる。ますます疑わしそうな顔で。

「あの.....」おそるおそる発言したのはソーシャルなんとかの若林さんだ。「北極海で遭難？　でも、あなたが発見されたのは、そこの水津早湖で.....」

　桧山のお兄さんはうつろな目をして黙って首を横に振り、つぶやいた。（三十年.....か.....）

11・前に進むには父親という存在と

　そんな話、知らない.....初めて聴いた.....

「そう――ある時期を境に、ちょうどおまえくらいの年に、真は父親のことを忘れようと――帰らぬ父を忘れねばならなかった。健人や、おまえにもわかるだろ、わからんか？
　前に進むには父親という存在と戦わねばならん。そういう時が来るんだよ」

　それを聞いて初めて僕は――感情にまかせてとんでもないことを言ってしまったかもしれないと気がついた――
　僕の両親への鬱屈した気持ちは、父が十四、五歳のころ、自分の親に抱いていた気持ちと同じだったかもしれないんだ――

　病室の戸がノックされて、そろそろと開いた戸口から看護師さんが顔をのぞかせた。
「時間がだいぶ超過しています。患者さんの負担が心配ですので、そろそろ.....」

　塚田と若林のおじさんたちが言葉少なく席を立ち、ひいじじいも立ち上がって言った。
「健人、腹減ったろ？」

11-b.png

12・病院の食堂ってふしぎな雰囲気だ

　あんまり、食欲がない

「若いもんがなにを言ってる。なんでもおごってやるぞ、好きなもん、頼みなさい」

　……でも……

「さあさあ。ほら、メニュー」

　……じゃあ……ごはんお替り自由の生姜焼き定食と焼きそば

「（ 食欲ないんじゃなかったのか ）……ジュースはいらんのか？」

　水でいい。プロテイン飲むから

　病院の食堂ってふしぎな雰囲気だ。嬉しそうな人、ほっとしてる人、落ち込んでる人。怒ってる人。いろんなエネルギーが入り混じってぐるぐる渦を巻いている。いろんな表情の人が入り混じって口を動かしている。

　僕は今日の学校の給食アジフライを思い浮かべながら焼きそばをおかずに生姜焼きをがっつき、ひいじじいは山菜がどっさり乗ったかけそばをすすった。

　窓から駐車場が見下ろせる。駐車場の隅っこで塚田のおじさんが車に乗り込もうとしているのが見えた。

13・三十年前の新聞記事を調べよう

　県警・人身安全対策課の塚田常昭(ツネアキ)氏の当面の任務は、水津早湖の小島で行き倒れのように倒れていた男の身元を確かめることだった。
男は衰弱しきっていたうえに、記憶は混濁していて、ろくに話ができない、身分証も所持金もない。しかし第一発見者が小島の所有者で、「知り合いに、親族が行方不明になって戻らない人がいる」、というので、もしやと連絡をとってみたところ、駆けつけてきたのが間宮氏だった。
間宮氏によってこの男が『ひやまけん』という名だとわかったのである。とはいうものの、『ひやまけん』の方が話を合わせている可能性もある。
そこで、別の証人が必要となり、’すぐに連絡のとれた’ 間宮健人.....間宮氏のひ孫.....が現れたのだった。

　彼らの会話を頭の中で整理してみると.....彼らは初対面だった。互いのことをまるで知らなかった。が、『ひやまけん』は間宮 健人の父の父だというのだ.....

　塚田氏がめぐり合う個々の案件はたいてい、人間同士のトラブルで、彼もひとりの人間、それらに対してなんの感情も抱かない、わけではない。事態が複雑にこじれてしまっていることもあれば、当事者も関係者も精神的失調に陥っていることもある。当事者とはある程度距離を置いていなければならない、感情的に巻き込まれては、職務が果たせない。いくつか案件に関わるうちに抱いた感想や感情はすみやかにジップしてしまうようになった塚田氏である。

　桧山 健と間宮 健人。
一見したところ、彼らの間に血縁関係があるようには見えなかった。顔つき、体つき、雰囲気、似たところがまるっきり、見いだせない。祖父と孫の関係？　百歩譲って、せいぜい兄弟だ。義理の関係なのか？　それにしても――

　午前の診療が終わって閑散とした待合室の長椅子に腰をおろし、しばし、腕組みをして沈思黙考する。神職だという間宮氏の話を聞くうち、ふと思い出したことがあった。

　――半年前に彼の高齢の祖母が他界した。
その通夜の席、故人の枕辺。
『おばあちゃん、昔、テレビのニュースを見てぼろぼろ泣いとったことがある』。

『飛行機が落ちたってニュースだよ.....』。
『ツネアキ、あんたが小学校通ってた時分のことさ、ツネアキより小さい子が、お父さんが帰ってこないって。奥さんも気の毒に.....かわいそうになあって.....そりゃあ、心の優しいおばあちゃんだった』。

　昔、テレビを見ていた祖母が泣いているのを見たかもしれない。けれども、その理由までは知らない。
三十年前の新聞記事を調べよう。それと、間宮 健人の父で、桧山健の息子だという、間宮 真について。

　彼はおもむろに立ち上がってエントランスを出、車に乗り込んだ。
テニスの間宮真という名を聞いたことはあるが、テニスに興味はなかったし、聞いたことがあるというだけだ。彼が地元の県警に就職して初仕事で四苦八苦しているとき、間宮真は海外で華々しく脚光を浴びていた。年は近いかもしれないがあまりに違う世界の人間だ。
それでも、報告書で触れないわけにいかないだろうし、調べてみよう。一応。
そう心に決めたのだった。

14・どうして誰も教えてくれなかったんだ

　これだけ昼飯を食ってしまったからには、ぜったい睡魔がやってくる。しょうがない。午後の授業はあきらめよう。だいたいこんな妙な気分じゃ、授業受けたって頭に入りっこない。

　ひいじいちゃん

「んー？」

　ひいじいちゃんの言ったこと、あれ、本当なの？　飛行機事故のこと

「ああ。本当」

　僕はどうしてなんにも知らないんだ？　どうして誰も教えてくれなかったんだ？

「うーん。まあ、一言で言って、終わった話だったからだ」

　終わった、話？

「うむ……おまえのパパは十五の年に、行方不明の父親を待つのをやめた。父親の思い出を封じ込めた。父親なしで生きていくと決めたのだ。おまえが生まれるずーっと前のことだ」

　それまで、ずっと、帰ってくるのを待ってた？

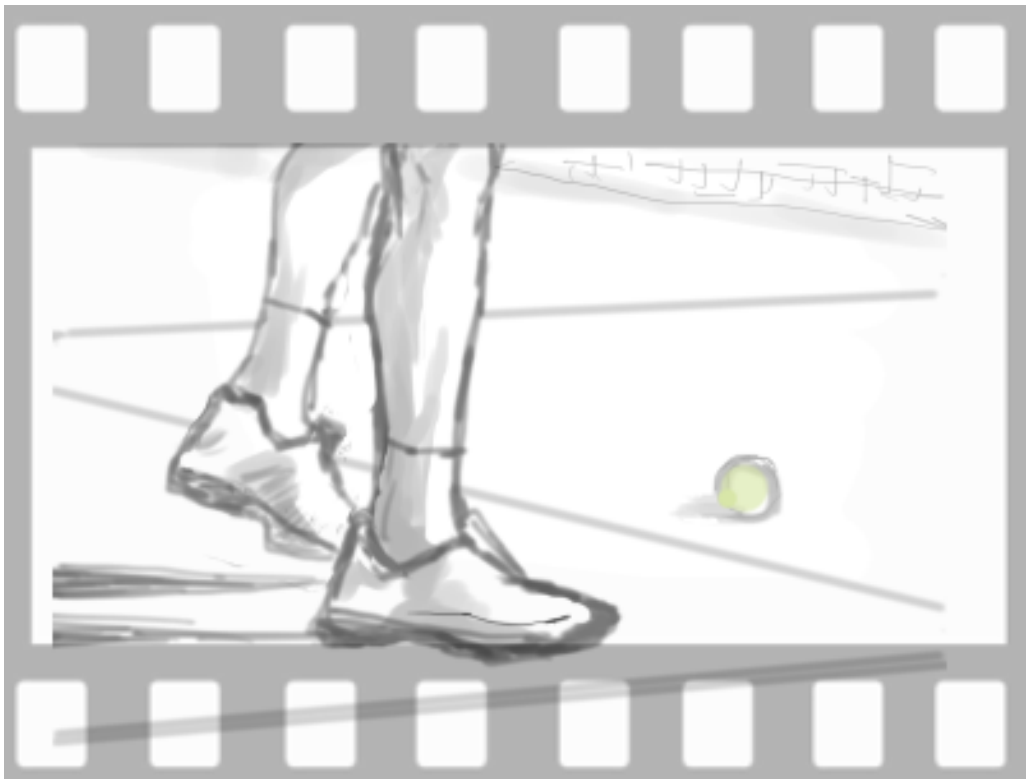
「必ず生きて戻ると信じてた」

　……

「桧山健は物心つかないうちに両親を亡くし、他人の中で育った。彼と本当に血がつながっているのは息子の真だけで、真も彼を父に選んで生まれてきたというくらい、二人は強く結びついていた。そして健くんは息子のために……。

自分をこの世に生み出し育んでくれた父を、捨てる。自分が生きるために。生木を引き裂くような、断崖を蹴って飛び出すような、過酷な試練だったはずだ。真の心の中に触れることのできない部分として残っているだろうと、想像に難くない。おまえがなにも聞いてなかったとしても、私は、いたしかたのないことだった、かな、と」

　ひいじいちゃんは――言葉を選び、選び、そう、言った。



14.png

15・三十五歳の息子と二十八歳の父親

　でも――パパのお父さん、帰ってきちゃったんだ――

「そう、だな。五歳の真と別れた時のままの姿でな」

　パパは――なんて思うだろう――

「さあなあ」ひいじいちゃんは珍しく、深い深い息をついた。「三十五歳の息子と二十八歳の父親だ」

ねえ、さっきさ、なにか言いかけたよね。『健くんは息子のために』、って。飛行機事故と関係あるんでしょ？　ひょっとして、息子を生還させるために父親が犠牲になった、とか？

「ああ。いや。そうじゃない、こともないか」

　……？

「彼は――桧山 健は息子の魂を救う戦いに赴いた。だから帰らなかったのだ」

15.png

16・今夜は一杯やりながらとりためたお笑い番組を

　今日のひいじいちゃんはなんだか口が重い。ふだんなら、うるさいなってくらいダジャレ連発でひ孫のごきげんを取ろうとするんだが。ひとりになったら落ち込むんじゃないかなあ。ぐだぐだ心配していると、

「え？　わし？　へーきへーき！　今夜は一杯やりながらとりためたお笑い番組をみるぞー。日々新鮮なネタを仕入れるのがわしの使命じゃ！　さて、つまみは何がいいかな」

　……今夜、ひいじいちゃんとこに、泊めてもらおうかなあ　僕

「なんと！　じいちゃんと一杯やるか！」

　……心配なんだよ！！

「ひ孫に心配してもらうほど、わしゃ、老いぼらとれん！！」

　日本語おかしいよ！！

「心頭滅却すれば火もまた涼し！」

　動揺してるよねー

＊

　僕らは最上階の談話室にいる。帰る前にもう一度、健くんの顔見たいというひいじいちゃんの希望で、面会時間がくるのを待っているのだ。病院は高台にあるのでいい眺めだ。すぐそこに湖がきらきらと輝いている。

　なんでも、桧山のお兄さんの第一発見者という人がこの病院のオーナーなんだそうだ。それでお兄さんはすぐにここへ運ばれたんだって。

「第一発見者が別の人で、別の病院に担ぎこまれていたら……本人は記憶喪失状態で所持品もなくて……そうしたら、二度と会えなかったかもしれんなあ」

ひいじいちゃんがしみじみと言う。こんなひいじいちゃんを初めて見る。やっぱり一人にしておくのは心配だ。発作的に世をはかなんで何かやらかすかも。決めた。今夜はいっしょにいてやろう。ついでにあしたも休んじゃえ。

心ひそかに決心していると、談話室をのぞき込んだ人と目が合った。ソーシャルなんとかの若林さんだ。

17・ひいじいちゃんは、はたと身構えた

　談話室には僕らのほかに何人かいて、それぞれ黙って考え事にふけっていたり、連れの人同士で小声で話してたりする。若林さんは僕らの方にまっすぐ歩いてきて、「やっぱりこちらでしたか！」、と言った。ひいじいちゃんは、はたと身構えた。「健くんがどうかしましたか！？」

　若林さんは手のひらを左右に振って、いいえ、とジェスチャーしながら、「今、面会の方がみえているのですよ」

「面会人！？」

「ええ、お身内の方のようです。で.....患者さんの今後のこともありますので私もお話を伺いたいと思いまして.....」

　別室を用意したんで、そっちへ移動して、そこで待っていてくれという、そういう話だった。

　別室っていうから殺風景な会議室みたいなのをなんとなく予想してたけど.....アイボリーの壁、チャコールグレーのカーペット、椅子とテーブルの天板は同じ系統の少し薄い灰色、本を広げたり勉強するにはちょうどいい高さ。椅子は十くらいあるから、やっぱり会議室なんだろう。壁の棚には細いガラスの花瓶。薄紫のスイートピーが何本か無造作な感じで入っている。窓には縦長のブラインド。ほとんど閉じられているが部屋の中は春の日差しがあふれていた。

　どこでもご自由に、と若林さんに勧められて、僕とひいじいちゃんは隣り合って、若林さんは僕らの向かい側に着席した。
やがて――開けっ放しだったドアを誰かがコンコン、とノックして入って来――

「――おまえか！！」と、ひいじいちゃん。

「“おまえか”はないでしょ！！」

おばあちゃん！？

この人はひいじいちゃんの娘で、僕のパパのお母さん、つまり僕のおばあちゃんなのだ。ああ文字だけだとワケがわからない！

17.png

18・人生最大の、びっくり仰天、晴天の霹靂的な何か

「どうしたんだ、こんな時間に！」
「どうしたもこうしたもないでしょ！　急用だ、すぐに来い、って言ってきたの、誰よ！」
「わしじゃ」
「ったくもう」
「いや、それにしたって」
「おとーさんの住んでるところは私のいるところの真北なの！」
「いやいや、それにしたって」
「健人！！」おばあちゃんはもう、ひいじいちゃんを相手にしていなかった。「久しぶりね！　聞いたわ、あなたが真っ先に来てくれたんですって？　ありがとう、本当に！」
「真っ先に来たのはわしじゃ」
「うん。おとーさんも。ありがとう」一文字ずつ、区切りながら。
「うむぅ。いや、それにしたってな」
「あのねえ」ぽんぽんと景気のいいおばあちゃんは、ちょっと口をつぐんだ。「予感、がしたのよね。この日はスケジュール空けとかなきゃ、って」

　僕もひいじいちゃんも、おばあちゃんの五十代には見えない若々しい顔をまじまじと見た。

「何かある。それも、あたしの人生最大の、びっくり仰天、晴天の霹靂的な何かよ。だったら、『それ』しかないわ！」

　――おばあちゃんは、待ってたんだ……

「もちろん。三十年経とうが、百年経とうが、たとえ自分が死んだって、待ってたわよ。ちょっと――どうしたの？　なんであなたが泣くのよ健人」

　泣かせるぜおばあちゃん

　おばあちゃんは笑って、ぎゅっと、僕を抱きしめてくれた。

18.png

19・これほどかしこまったひいじいちゃんは初めて見た

　そこへまた、軽いノックの音。それから、「失礼いたします」、と女の人の声。

「こ、これは！」
　ひいじいちゃんの顔つきが変わった。今日はひいじいちゃんの知られざる一面をいくつか垣間見たが、これほどかしこまったひいじいちゃんは初めて見た。いったい誰？
髪を結いあげ、全体に植物の模様の入った和服を着ている。看護師さんじゃあなさそうだ。

「今日にでもお宅の方へご挨拶にうかがうところでした！　その節は、まことに――！」

　女の人はしとやかな仕草で首を横に振った。「わたくしはぐうぜん、通りかかっただけです。それにしても、もうかなり回復されたと伺いました。本当に、ようございました」

　なんて――きれいな声。いつまでも聞いていたいような優しい響き。そのひとはひいじいちゃんとおばあちゃんとあいさつをかわし、僕を見た。

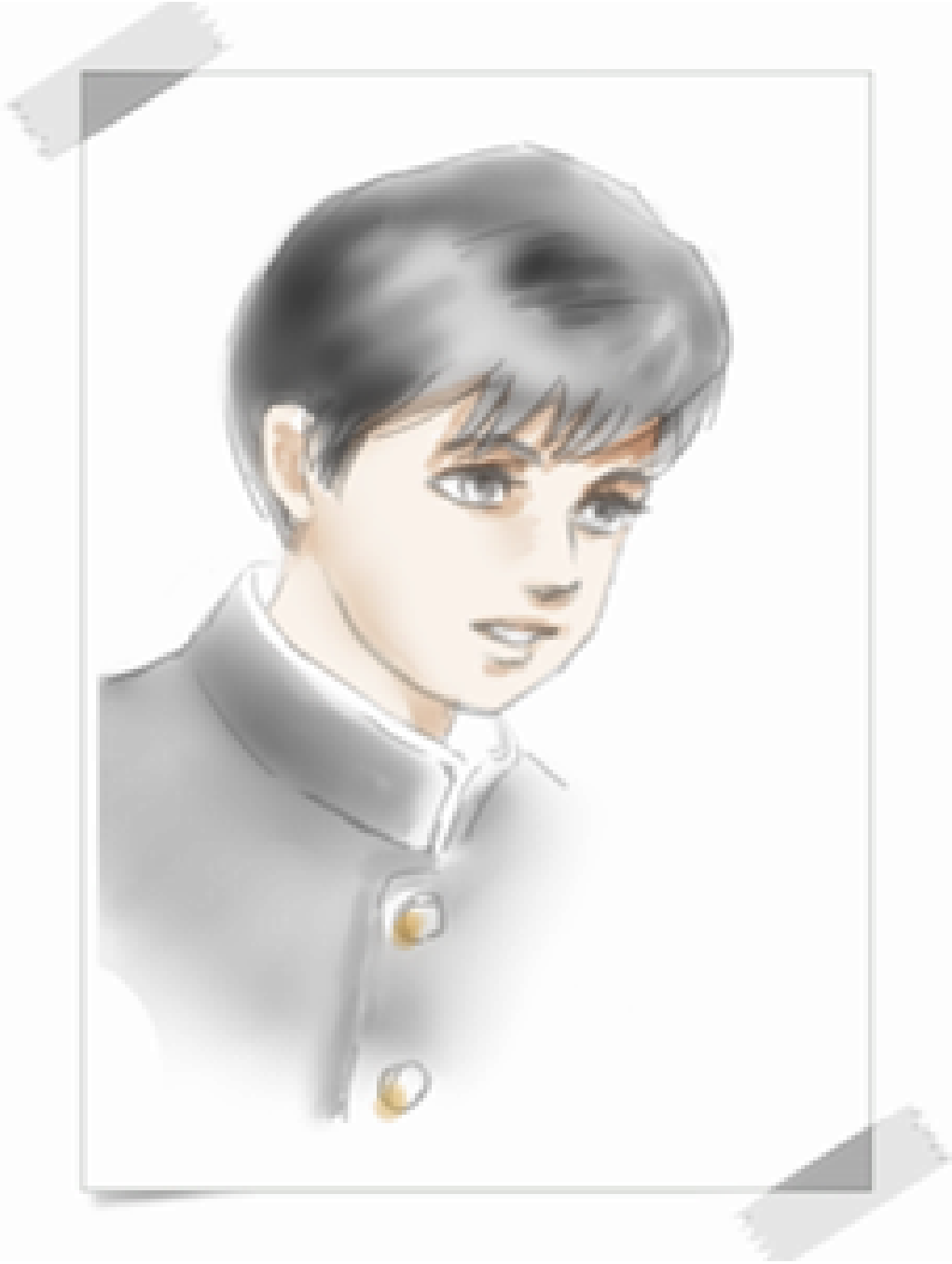
　一目で僕は――どこかで会ったことがある、と思った。それとも既視感というのかな。そんな第一印象だった。でも、そのひとは、「初めまして」とほほ笑んだ。うちのおばあちゃんと比べて……わからない、いくつくらいなんだろ。すごく若く見えるんだけどオーラというか、貫禄を感じる。とても上品で、とても澄んだまなざしをしていた。「初めまして」？　じゃあ初対面なんだ。もしかしたらテレビでみたのかもしれない。

「間宮真くんの息子さんね。初めてお目にかかりますわね。わたくし、西ノ宮、と申します」

　パパの知り合い？ 西ノ宮って、やっぱり知らない名前だ

　僕はふと、妙なことに気がついた。

　この西ノ宮さんてひと――パパに似てないか――？



19.png

20・死人を生き返らせ現世に復帰させる

「えー、みなさんつもる話もおありでしょうが、私の方から少々お話させていただきます」

　西ノ宮さんとおばあちゃんが席に着くと、若林さんがかしこまって口火を切った。
「ほかでもない、桧山健氏の今後、ということででして、回復が順調に進めば退院、社会復帰といったことが考えられるわけでありますが.....お話を聞く限り、桧山氏には、ひょっとしたら三十年間という、現代社会との隔絶があるわけでして」

　そこまで聞いたところで、おばあちゃんが、すっ、と手を挙げた。

「若林さん、それから、竜門渕記念病院さま、お気遣いを感謝します。けれども、ここまでにしてください。桧山健は早急に退院させ、私が家に連れて帰ります」

「え。あのですね、おかあさん」

「妻です」

「奥さん。早急にとおっしゃられましても、社会復帰の話の前に、県警の方の身元確認もまだ、完全に回復したわけでもないのですよ、これからいくつか精密検査が待ってますし」

「桧山健は法律に則って既に失踪宣告がされています。法律上、この世にいないんです。そんな人間の身元を確定し社会復帰させてくださるのですか」

「は―はあ――」

「若林さん、私はあなたにも病院にも迷惑をかけたくないんです。どうか穏便に私たちを出国させてください」

「そうはいきません！　迷惑もなにも、だいたい、退院にはいろんな手続きがいるんですよ、この書類全部に関係者のハンコがいるんです――！」

（ おい！ ）ひいじいちゃんがテーブル超しにおばあちゃんに詰め寄った。（ おまえ、まさか自分ちの飛行機で来たのか！？ ）

（ あたしは民間機だけどね。ほかの人たちはそうはいかないでしょうよ ）

「ええっ！？」

　ひいじいちゃんはびっくりして立ち上がった。いったいどうしたってんだ！？

「わ、若林さん、わしからも頼みます！　　すぐに健くんを病院から出してください！！」

「なにをいってるんですか、患者は点滴打ってるんですよ、そんなことできませんよ！！」

「いや、しかしね！」

　若林さんとひいじいちゃんが言い合っているところへ割り込んだのは、西ノ宮さんだった。

「若林さん、あなたが責任感の強い方だというのはよくわかりました。けれどもこの責任はわたくしが負います。ですから、この方たちの言うとおりにして」

「そんな！！　　理事長まで！！」

　会議室備え付けの電話がいきなり鳴り出した。若林さんはいらいらと電話を受けにいき、一言二言で顔色を変えた。

「なんだって！？　　ちゃんと、わかるように説明を――うん――うん――なんで面会人がそんなに――五階の個室――？」

　それを聞いておばあちゃんががたっと椅子を鳴らして立ちあがった。「来ちゃったわ――」

　元・神職のひいじいちゃんが頭を抱えて「オーマイガー！」とうなったみたいだったけど。聞き間違いだよね、きっと。

21・男たちが呪文のように「五階」と唱えながらぞろぞろと

「fifth floor」「5. Etage」「quinto 」「5ma mahala」「tabek al-khamis」「5-ye poverkh」「5os orofos」「五楼」

　男たちが、呪文のように「五階」と唱えながらぞろぞろと走るように歩いていく。半分は黒服、半分は白衣、という妙な集団。全員アタッシュケースを携えている。

「なんだなんだ！？」「どこのそしきだ！」「殴り込み！？」「おい、デイリだって！！」「アタッシュケースの中は機関銃だ！！」「じゃあ、五階にターゲットが！？」

「ちょっとちょっとちょっとー！！」
「あ、間宮 ひろ」
「レル・ヴァリス！！　あんたなの！？」
「はあ、弁護士と医者にいっしょに来てくれって声かけたら、こんなに集まっちゃって。もう押すな押すなの大騒ぎ」
「そりゃあ、腕のたつのを２、３人、って頼んだけど！　なにもこんなにたくさん！
いったいぜんたい、おたくはヒマなの！？」
「だって、総裁の帰還なんて大事件ですもん、二度とありゃしません」
「あれ？　あたし、あんたにそれしゃべった？」
「ボクはパウジーニさんから聞きました」
「ああ――しっかり者で口の固いアントニオ・パウジーニさん！　実はお調子者のイタリアンだったのね！　で、そのパウジーニさんはどこ？」
「先頭を走ってましたから、もうそこの病室にゴールしてるかと」
「あのねーマラソンじゃないのよ！！　みんな、ちょっと！　ちょっと待って！！
話を聞いて！　あのね、みんな、遠い所を来てくれてありがとう。みんなが聞いたとおりよ、総裁が帰ってきました！」

　一瞬、間をおいて、「オオ！」低いどよめき。

「ええ、無事に帰って来たわ、でもね、今、とっても体が弱ってるの。体はガタガタで、ひげは伸び放題、髪の毛ぼさぼさ、頬はげっそり、目はうつろ、おまけにパジャマ姿だし」

　ひとりふたり、目を光らせてカメラを取り出した者がいた。間宮ひろおばあちゃんは目をつりあげてそいつらを睨みつけた。

「だからねえ！　みんなの記憶にあるかつての華麗な桧山健じゃないの！　あたしは彼の妻として夫のそんなしょぼくれた姿を見てもらいたくないの！　本人も見られたくないはずだわ。それにここは一般の病院、みんなみたいに一般人ばなれした人たちがたくさんいると、病院にも患者さんたちにも迷惑かけるんだって.....わかってもらえるかしら？」

　彼女は黒服の男たちに向かって英語を使っていた。夢中で声を張り上げてから、ふと気がついた。五階の廊下が野次馬でいっぱいになっている――！

＊

「えらい言われようだな」

「シニョーラ（奥方）は相変わらずでいらっしゃる」

　ここ五階の個室に、間宮 ひろの熱弁は丸聞こえだった。

22・これはまたずいぶんと弱気なことを

「来てくれて助かったよ、パウジーニさん」

「なにをおっしゃいますか、ボス。予感があったのです。この日はいかなるスケジュールも入れてはならないと。何かとても重大な、私の人生最大のビッグニュースが飛び込んでくると。その時が来たらすぐに出発しなければならない。だからジェット機も誰にも使わせないようにして押さえてあったのです」

　桧山 健の筆頭秘書は、彼自身知らずに間宮ひろと同じことを言った。もっとも、その『予感』は、パウジーニと間宮ひろだけではなかった。ジェット機に同乗した者たちのなかには、同じ予感を抱いていた者が少なからずいたのである。

「正直、面倒なことになったと思ったよ。目が覚めたら日本にいて、それはそれで混乱した。北極海に現れた方がまだ辻褄が合いそうなものだからな。警察が来て身元確認がいるというし、社会福祉の人間が来て.....たぶんこれからどうするという話だろう。いっそ、病院を抜け出して姿をくらまそうか、逃げ出してしまおうか」

　パウジーニは笑い、真剣な表情で言った。
「これはまたずいぶんと弱気なことを。逃げ出そうとは。あなたの本質は戦士なのに？」

「かつて.....考えたことがある。悩んだといった方がいいかな。たとえ本質的にそうだとしても、戦いようのないものに出くわしたとき、オレになにができる？　たとえば.....過ぎ去った時間.....」

「そうですね、考えて、悩むことですね」

「けっこう冷たいね。自分だけの問題ならそれでもいい。しかし自分以外の存在が絡んでくるとなると――」

「ご子息の、真くん？」

「そう。妻、息子、その家族。それから.....。君らにとってもオレは三十年前に死んだ人間だ。じっさい、オレは冥界に踏み込んでしまったんだから」

「ボス」パウジーニは深い声音で言った。「あなたにはこれからやるべきことがあるんですよ。だから生き返ったのではないですか？」

「.....」

「とにかく、まずご自宅にお帰りください。財団がどうなっているか、お知りにもなりたいでしょう、その辺は追々。あなたの個人秘書が仕事をさせていただきます。腕利きの弁護士と医者を連れてきました。ああそうだ、ヴァリス先生が来ていますよ」

「レル・ヴァリスが？　彼も健在なのか？　つくづく腐れ縁だな」

「そんなことをおっしゃられては先生がかわいそうですよ。彼は率先して人を集めてくれたのですから。さ、あれこれ考えずに。スーツはこれでよろしいですね？　よかった、体型が変わっておられなくて」

「ああ.....パウジーニさん.....」

「まだなにか？」

「もう一日。いや、半日でいい、時間をくれないか」

23・全員招待するには人数が多すぎる

『かわいや』は湖岸通りからちょっと奥まったところにある。創業が明治三十五年 (※) だというから、りっぱに老舗の温泉旅館だ。本館と別館があって、本館は黒服・白衣のおじさんたち、別館は僕ら.....年の順でいくと、ひいじいちゃん、間宮のおばあちゃん、桧山のお兄さん、それから僕.....の貸し切りだった。なんか、すごく高そうな旅館なんだけど、いいのかなあ。

「本当はみなさんをわたくしのところへお招きしたいのですけれども」、と、ちょっと申し訳なさそうに西ノ宮さんが言う。全員西ノ宮さんちに招待するには人数が多いから、旅館で勘弁してね、ということらしい。

「いやいや。そんなもったいない」ひいじいちゃんはまだ平身低頭状態。

「なにからなにまでお気を遣わせてしまって、ほんと、申し訳ありません」
　景気のいい間宮のおばあちゃんもさすがに小さくなっている。「あんなにたくさん、いっぺんに押しかけてしまって」急ぎの仕事のある人は帰っていいわよ、と言い渡したのだが、誰も帰らなかったのだ。

「いいえ。旅館の者は外国の方には慣れておりますし、私も先ほどみなさんの浴衣のご用意などお手伝いしてまいりましたが、みなさん、ジェントルマンでらっしゃいますわ」

「え、西ノ宮さんがそんなことを？」

「はあ。人手が入用になりますと、声がかかることがありますのよ。なにぶん、身軽なものですから。でもね、ひろさん、あなたこそお気を遣わないで。みなさんと縁があってのわたくしなのですから」

　桧山のお兄さんは本館へ行ったきり、戻ってこない。黒服のおじさんたちと仲良く話をしてるんだか、白衣のおじさんたちに締めあげられてるんだか。

　ひいじいちゃんは温泉につかって気持ちもほぐれ、平身低頭しながら西ノ宮さんにお酌なんかしてもらってる。なんだか、ほっとした。病院から強引に出て来たときはどうなるかと思ったけど、お兄さんは病室でひとりじゃないし、おじいちゃんもひとりで晩酌しながらお笑い見てるわけじゃない。

　肩の荷がおりたような（ なにもしてないけど ）気がして、僕は縁側でひざを抱えて月を眺めていた。空気は柔らかく、花の匂いが混じっていた。

※：創業者の河合保兵衛（ 保ノ助の父 ）はこのとき二十歳そこそこの若者だった。

24・おまえと話したかった

　廊下の向こうから、健人、と呼ばれた。桧山のお兄さんだった。ひとりじゃなかった。金髪に青い目。絵に描いたような外国人。お兄さんが、こっちへ、と手招きするので僕はひいじいちゃんたちをちらっと横目でみながら立ち上がった。

「食事はすんだのか？」と聞かれ、うなずく。昼間、病室で見た時とは別人みたいだ、と思った。さらさらの真っ黒な髪、切れ長の真っ黒な目。間宮のおばあちゃんが、弱っている姿をみせたくない、と言っていたのもうなずける。

「こちらはヴァリス先生だ。初対面かな？」

　金髪碧眼のヴァリス先生がすっと手を差し出してきたので、僕も思わず手を出してしまった。あんまり美形なんで.....桧山のお兄さんほどじゃないが.....つい見とれてたのだ。

「初対面でもないんだな。きみが生まれたばかりのころ、いちどお目にかかってる」流ちょうな日本語。

　――そうなんですか

「レル・ヴァリスです。よろしく。いずれまた、どこかで」それだけ言うと僕の手をぎゅっと握り、「じゃ」、と行ってしまった。

「彼は、おまえの父が中学生だったころ、しばらくの間、面倒をみてくれたんだそうだ。それも場所はこのあたりで。ひどく懐かしがっていた」

　――へえ

「出発を、半日伸ばしたのは、おまえと話したかったからだ」

25・追い風のなかを航海に出る

「真は、おまえがテニスをするのを頭ごなしに反対した、と言ったな」

　――うん、じゃなくて、はい

「オレが同じ立場だったら、やはり反対する。ちなみに、幼い真にテニスを教えたのは、オレだ」

　教えたのに？ ――なんで反対するんですか！？

「追い風のなかを航海に出るのは簡単だから」

　――――

「自分と異なる考えを知って、初めて自分に問う。今のおまえのように。なぜ。どうして、と」

　――――

「なんのために。誰のために。反対者が正しいのか。自分は間違っているのか。問わなければ答えはやってこない」

　――――

「という話をおまえにしたかった。いずれまた、どこかで、会えるかもしれんし、会えないかもしれん。道は合流するかもしれんし、永遠に平行かもしれん。選べない道もあれば、選べる道もある。選べるならば、選ぶのは自分だ。いいか、健人、決めるのは自分だ」

　で――でも――自分で決めたって――ムリなことってあるじゃんか！　お金のこととか！　お兄さん知らないのか！？　テニスってすごいお金かかるんだよ、ラケット代、シューズ代.....コートに合わせて何種類も.....、ウェア代、スクール代、試合のエントリー代、それに――とにかく、いくら僕がやりたくたってパパがダメって言ったらダメなんだ！！

「そういえば真は通ってる学校にクラブがなくて民間のスクールで練習していたとヴァリス先生が言ってたな.....」

　ああそれ。有名なスクールだったんだけど、そこの優秀なコーチがなんとかいう財団にスカウトされて引き抜かれちゃったんだって。コーチがいなくなった後は有名なスクールからふつうのスクールになっちゃった。高いスクール代払ったって、いいコーチがいないんじゃあ.....

「なんとかいう財団？」

　なんとか＆なんとかって言うんだけど、忘れちゃった、外国の財団だって

「ふ.....ん、なるほどな。まあ、なんにしても、親の反対にあって諦められるなら仕方がないが.....おまえはゲームもそうなのか？　相手が強かったらゲームを諦めるのか？」

　そ――それは――

26・勘弁してくれそれだけは

「健人、限界とは自分で作った壁、自分で作った幻想だ。それは外にではない。自分の内にあるのだ。おまえにはまだ難しいかもしれんが、必ず理解できるときがくる」

　――あの――

「うん？」

　ひいじ、いや、曽祖父はいつも僕に甘かった。父も甘かったけど、テニスの話だけはしてくれなかった。今通ってるスクールはなんか物足りない。今みたいな話、初めてです。初めてなんです。僕は.....あなたのこと、先生って呼んでいいですか？？　それとも、お、おじいちゃん？？

「じいさんだけは勘弁してくれ。孫がいる年じゃない」

　でも、事実そうなんでしょう？　現実をみなくちゃ！

「.....」

26.png

27・証明終了

「あー県警の。塚田さん。朝からどうもご苦労様です」

　若林ソーシャルワーカーはどうみてもほうけている、と塚田氏は思った。いつも分厚いファイルを抱え、院内端末で細々と通話しながら足早に歩き、会う人ごとに声をかけている。オーバーワークなのではと他人事ながら心配になるが、とにかく、自分の仕事が先である。

「昨日はどうも。で、さっそくですが、あれこれ調べてみましたがどうもわからなくて。元神職・間宮氏の供述以上のことが出てこんのです。当該患者と面会したくてお宅の受付に申し込んだら、なんだか要領を得ないんですよ。どうしたんですかいったい」

「あーそのことね」若林氏はぼーっとした面持ちで言った。きらめく眼差しが印象的だっただけにそのほうけぶりは目についた。「患者はもういませんよ」

「いないって、転院？」

「いえ、出て行きました。奥さんが秘書をつれて乗り込んできて、連れていってしまいましたよ」

「ええっ！！　なっ、なんで教えてくれなかったんですっ！?」

「そうでしたね、申し訳ない、なにしろ、奥さん、秘書のほかに自前の弁護士、自前の医者を従えて怒涛の勢いで、あれよあれよという間のできごとで」

　あーそーだとつぶやきながら若林氏はファイルの間からなにやら封筒を抜き出した。A ４サイズの、しっかりした封筒。どうぞ、といわれて塚田氏は中を改める。「これは.....?」

「例の患者さんの、第一子が生まれた時の出生証明書と DNA 鑑定書。原本のコピーと邦訳。平たくいうと、生まれた子が両親と間違いなく血が繋がってますっていう証明書です。日付が入ってます。三十五年前の日付。この証明された人間、マミヤ＝シン・ヒヤマと昨日来てた中学生の血の繋がりが証明できれば患者さんが桧山健だということに、なりませんかね。A ＝ B、B ＝ C、ならば、A ＝ C、というわけですよ」それから、「秘

書と医者からたぶん必要になるだろうとアドバイスされて、奥さんが持ってきたんです。手回しいいですね」、と付け加えた。

「マミヤ＝シン・ヒヤマ.....」

「間宮真の本名です。奥さんが間宮家の一人っ子だったんで、マミヤの名を残そうと桧山氏がつけたんだそうです。日本じゃ通用しませんが、彼らは全員、オーストラリア国籍、ちなみに失踪した時の桧山氏の仕事の拠点はベルギーだったそうで」

「.....じゃあ.....日本に資料がないわけだ.....」

　なんだかなあ.....そうつぶやきながらトボトボと職場に戻った塚田氏はいきなり上司に呼ばれた。

28・嫌な予感とともに上司の元へ出向く

　帰署早々のお呼びである。嫌な予感とともに上司の元へ出向くと、そわそわと待ち構えていた上司は「ちょっとこっちへ」と塚田氏の腕をつかんで部屋の外へ連れ出した。

「課長、くだんの案件でしたらこれから報告書を――」
　だから、話をきいてくださいと言おうとした。しかし課長は小さく首をふるばかりで、塚田氏の腕をつかんだまま廊下を歩いていき、エレベーターに乗り、最上階で降りた。これ以上上に行くと屋上にでてしまう。建物の構造上も職制上も一番上の場所だ。塚田氏は恐れおののいた。自分はいったいどんな不始末をやらかしたのか――

　人身安全対策課・課長の震える手が会議室のドアをノックすると、中からドアが開いた。（ 部長―― ）

　部長はささやいた。（ 君らだけだろうな？ ）（ は。もちろん ）（ 入ってくれ ）中で顔を揃えていたのは――お偉いさんばかりである。

　腕をつかんでいる課長の手のひらは汗で湿って気持ちが悪かったが、本部長の前で、ようやく離れた。「遅くなり申し訳ありません」

「いや、忙しいところを突然呼び立てて、諸君、申し訳ない。ちょっとばかり、聞いてもらいたいことがあってな」

　塚田氏は、あれ？　　と思った。叱責のたぐいではないのか？

「実は、今朝、竜門渕記念病院の理事長が見えられてな、要件は先日、人身安全対策課が受けた身元不明者についてだ」

　課長と塚田氏は内心、どきっとした。

「救急車の要請を受けた救急隊員が、患者の身元が特定できなかったんで、規定通り警察に届けた。それで人身安全対策課が出向いたわけだ。しかし間もなく身元は判明した。ついてはこの案件はなかったことにしてほしい、と」

「あの、そういう話を、病院の理事長が？」とけげんな顔の部長。

「そうだ。普通に考えたら、担当者が言って来ればすむ話だ。それを――わざわざ――」

　汗をかいているのは課長だけではなかった。空調は効いているのに、本部長の額は汗でうっすらと光っている。

「.....年齢の若い者や、この土地出身でない者には、理解しがたいことかもしれん。しれんが、この際だから、話しておこうと思い立って諸君に集まってもらったのだ」

「本部長、理解しがたい、とは？」

「うむ、この辺の土地では――竜門渕記念病院をはじめとして、学校、灌漑工事など、さまざまな施設が竜門渕という古い一族の私財を投じて作られているのだ。竜門渕家の最後の当主が十年ほど前に亡くなり、その名ですら忘れられてしまっているが、水津早湖周辺は昔からいろいろと不可思議なことが起こると、知っているものは知っている。バミューダ・トライアングルとまでは言わんが、超常現象が起こりやすい土地柄らしい。今回の身元不明者も、おそらく神隠し的な現象に遭ったのだろう。西ノ宮優美子氏は亡くなった当主の孫にあたる人で、その人がわざわざ出向いてきたということは――はっきりとは言われなかったが、その『行方不明者』、竜門渕の関係者なのかもしれん.....」

　西ノ宮 優美子氏の訪問は本部長には相当ショックだったらしい。

「なにを非科学的な、神がかり的なことをと、諸君らは思うかもしれん。しかし、竜門渕家の人間はその祖先を始祖に至るまで記憶していたという。ま、そのへんはもう余談になるが、であるからして、諸君らには職務の遂行にあたって、こういった土地柄であることを頭の片隅に置いてだな.....」

　本部長の訓戒は続いていたが塚田氏は聞いてはいなかった。彼は幼かった日に、祖母につれられて野辺を歩いたことを思い出していた。祖母は日課のように『竜神さま』をお参りしていたのである。

29・魂の求めるままに

　水津早町から山をふたつばかり越えたところに杉野森空港 (※) がある。そこで二機のプライベートジェットが待機していた。その二機がジェットエンジンを轟かせて飛び立って行った。行先はそれぞれ違う。一機はベルギーへ、もう一機はオーストラリアへ。オーストラリアへ向かったのは医療専用に特化した最新鋭機である。

　行っちゃったね

「行っちまったな」

　すっごいね

「んとに。連中、ここへ来るまでに健くんが合法的に出国できるよう手配済みだったというんだから。恐れ入るよ」

　よくわかんないんだけど、H ＆ L 財団て、なにしてんの？

「魂の求めるままに」

　.....は？

「人間にとって最も幸せなこと。それはおそらく、魂の求めるままに生きることだ。その実現のために連中は世界を股にかけておる。簡単に言うと、人材を発掘して育ててるのだ。たとえば、本当に才能のある者が経済的な理由で埋もれてしまうことがある。問題はその経済的というやつだ。人間の持つ才能.....それはつまり魂の本質なんだが.....往々にして才能を発揮することを妨げる『経済』とは、実は人外に起源があるパワーなのだ。連中はそのパワーと戦っているともいえるのだ」

　.....

「そのために、ラウレンスという人が何代にもわたって財団の基礎を作り、桧山が加わった。ジェット機に木の葉が交差したしるしがついてただろ、広葉樹と針葉樹の葉っぱ、月桂樹とヒノキの葉っぱだ」

　ひいじいちゃんの話に耳を傾けていたのは僕だけじゃない。西ノ宮さんもだ。今日は和服ではなくすっきりしたパンツスーツで、ゆるやかに波打つ髪が背中に流れている。ほんとに年齢がわからない。僕らは西ノ宮さんの運転する車でジェット機の見送りに来たんだ。

「感慨深いですわ――」西ノ宮さんはつぶやく。「この世は見た通りのものではないと、ことあるごとにそう思われます」

　ひいじいちゃんがうなずく。

「健人くん」

　はい

「あなたのお父様、間宮真さんとわたくしが似ているのを、不思議に思ってるわね」

　いきなり図星をさされてしどろもどろの僕を、西ノ宮さんは優しい眼差しで見ている。

「真さんが初めてわたくしと会った時、昨日の健人くんと同じ顔をしていたわ。僕はどうして両親にではなく、この人に似てるんだろう、って」

　.....

「長い、長い長い物語があります――」

わたくしの実家、竜門渕の一族は遡れば源である始祖に行きつきます。始祖の最初の子は神々の祝福を得られず、追放されました。始祖の嘆きをよそに、名を取り上げられて追放された子は己の出自を知らず、父なる者、母なる者を探し求めました。めぐり合った三者のうちふたりは夫婦となること、ひとりはその子となることを約束しました。三者は固い約束、強い絆で結ばれました。約束は、両親から子へ本当の名が贈られることで成就される。それを体現したのが.....
真さんはわたくしに似ているのではないの。彼は始祖の追放された子の似姿なのです

29-b.png

30・「いいね」、と間宮真は言った

「残念だわ、観戦できると思ってアメリカ経由にしたのに。エントリー取り消しだなんて」

「しょうがないよ。選手の故障が思ったより深刻だったんだ。今シーズンは治療に専念しろとさ。おかげで僕も仕事がなくなった」

「長期休暇？」

「いや。契約解除」

「解除って――」

「うん。もともと、僕は臨時のコーチだった。選手と専属コーチの間でトラブルがあって急きょ、声がかかったんだ。現役引退したら指導者を目指すって大っぴらに言ってたからだけど、選手とコーチの相性なんて実際組んでみないとわからない。ダブルスを組むより難しいかも。うまくいかないなんてことはよくあるのさ。クビにされたって別に驚かないよ」

「私は驚きます！」

「ごめんごめん。でも、おかげで国際指導員の資格は取れた。これで大手を振って日本に帰れる。本当にやる気も才能もあるプレイヤーたちの力になりたい。何年か回り道しちゃったけど」

「……息子がテニスをやりたいって言いだしたら、人には預けたくない、自分で教えたい……。あなたの夢だったわねえ、真」

「うん。だけどなあ……健人本人はどうなんだろ、父親になんか教わりたくないっていうかもしれないなあ」

「ありうるわねえ」

「『教えてやる』。『押しつけるなよ』。ああ目に浮かぶようだ」

「そうねえ……微妙な年ごろでもあるし。まったく知らない人に教わった方が、本人のためかもしれない」

「そう、だな。結局、健人が自分で決めるしかないんだよな」

「いつかきっと、教えてほしい、そう言ってくる時がくるわ、遅かれ早かれ、きっと」

「……うん」

「それはそうと、健人、ちょっと心配だわ。先週担任の先生に言われたのよ、最近メンタルが不安定だって。健人はあなたと違って感情の起伏が激しいのよ」

「反抗期だな。ぐれちゃったかな」

「反抗？　わたしに？」

「いや僕だよ僕。いろいろ思い当たる節はある。それにしてもあの、激しやすくて気の短いところは誰に似たんだろう。きみは何があっても落ち着いてるし、僕は至極おだやかな性格なのに。やっぱりおふくろ、かなあ」

「くすくす。お義母さまもおばあさまもお元気かしら。そうだわ、真、時間ができたんだから、今度みんなでお会いしに行きましょうよ」

「いいね」と間宮真は言った。「みんなでオーストラリア旅行だ。おやじの墓参りもしよう。そろそろ健人にもちゃんと教えてやらないと。あの性格でぐれたら面倒だ」

「どうかん！」

　離陸したジェット機の下で大都会がみるみる小さく、小さくなっていく。見慣れた視点。間宮真はその光景をよく真っ赤な朝焼けの中に夢に見る。
　そして彼の妻となった女性は夢の中に冷たい水を通して水面を仰ぎ見る。

　燃える情熱の炎と冷静な制御。彼らはひとつの魂の異なる側面同士なのだ。

　彼らの子と桧山健との邂逅が水津早湖で起こり、世界に新しい局面が開けたことを、彼らはまだ知らない。

30.JPG

kent-fifteen

あとがき

『nanako-fifteen』で始まり『kent-fifteen』で閉じる（ 現代の ）物語。

ほんとは、ナナコではなく別の名前なんです。『nanako-fifteen』の中でペンネームを使って、決して交わらない、隣り合った道を歩くことを述懐している、あの人。

この（ 現代の ）二つの話の間には二つか三つか四つの話が入ります。その前にベースとなる『Salamander in. . . 』がまだ序の口で、もー、いつになったらどこへ行きつくのかさっぱりわからない状態。『Salamander in. . . 』は見たこともない世界を資料ひっくり返しながらなので、けっこうストレスたまるのです。その資料をうつうつとひっくり返しているさなか、いつ書いたんだっけ？ と、目に留まったのがケントくんの話でした。

本筋から外れてるような話なんですが、主要人物を全部わきに追いやって、なんにも知らない一少年の目を借りて振り返ってみるという。でもやっぱり主要人物のパワーはすごい！　最初の三、四話あたりで十年近く放置してあった（ え〜？　ほんと、いつ書いたんだっけ？？ ）のが間宮ひろが出てきてから一気に突っ走ってしまった。おかげで『Salamander in. . . 』放置中。

テキストの間に絵が何枚か入っていますが、ぜんぶ、ケントくんのパパとママです。あ。最後の一枚は違いますね。
この話を読んでくださってる方の中にはひょっとしたら桧山健や間宮ひろの名を覚えておられる方がいらっしゃるかもしれません。筆者の中では彼らは今も出番を待って待機しています。

2021 年 12 月 20 日 峯村 明

久しぶりに読み返してみたら、なにやら刺激的で、いろいろ妄想してしまった。

桧山健氏、社会復帰前のリハビリで健人くんのコーチをやる、とか、息子を教える気でいた真との間に亀裂が、とか、桧山氏は三十年後の世界がもの珍しくて、きょろきょろしてすぐに立ち止まるから一緒にその辺歩きたくない健人くんの苦悩、とか、コーチ同士のエキシビションで元世界ランク二位の間宮真をこてんぱんにやっつけてしまう桧山氏の父親としての意地とか、ああ、夢が膨らんでしまう...あくまで...本筋じゃあないんで...でも.....

2026 年 6 月 22 日 追記

奥付

kent-fifteen

2021 年 12 月 20 日 初版発行
2026 年　6 月 25 日 第二版発行

著者　峯村　明　　E-mail　　dbailai388@gmail.com

表紙素材　「PIXTA」「Chat GPT」

制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社

Ⓛ　Akira Minemura 2021-2026

kent-fifteen

著　者　　峯村　明
イラスト　PIXTA
イラスト　Chat GPT

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社